

カンボジア・トンレサップ湖の将来—水上生活者の真の発展とは—

外国語学部英語学科 4年 山田友理

今年8月初旬、筆者はカンボジアのトンレサップ湖へ訪れた。トンレサップ湖は、東南アジア最大規模の淡水湖である。湖上で暮らす水上生活者との出会いは最も印象深く、豊かな漁業資源と浸水林に依存し巧みに生きる彼らの生活が帰国後も頭から離れなかった。訪問先であるチョンクニアス村は、100世帯ほどの家船が集まる水上集落だった。ほとんどが漁師の家というこの村では、学校や診療所、雑貨屋など生活に必要な物は全て水の上である。住居はもちろん、水の上。人々はトンレサップ湖の水量の増減に合わせて水上家屋を移動させ、豊かな自然の恵みを受けながら暮らしていた。しかしカンボジア内戦が終了した1993年を機に、トンレサップ湖では漁獲高の減少が問題視されるようになった。

漁獲高減少の背景には、現在カンボジアで活発に行われている先進国による開発援助の存在があった。特にトンレサップ湖では、アジア開発銀行が開発の主導権を握り、港建設事業や灌漑事業などの巨大大業を支援している。アジア開発銀行は持続的な開発と平等な成長、貧困層のための支援を謳い、多くのプロジェクトに携わっているがその中には同湖の環境や、水上生活者の暮らしを破壊しかねないプロジェクトもあり、住民や現地NGOから懸念の声があがっている。名目上は貧困の削減や環境改善といった目標を掲げながら、その裏では利益優先を指向する場合が多かったりする。一方で水上生活者はその波に取り残され、漁獲高の減少に悩み、従来の暮らしが脅かされつつある。トンレサップ湖に住む人々にとって、漁業は生命線である。魚は食事に欠かせない重要なタンパク源であり、生活を支える重要な収入源だ。よって無秩序な開発及び観光地化プロジェクトによる漁獲高の減少は、水上生活者の暮らしを左右する深刻な事態であり、食糧不足や貧困を招く恐れがある。

本論文では、先進国によるトンレサップ湖開発が積極的に行われようとしている今、水上生活者にとっての「真の発展」について論じたい。トンレサップ湖には様々なアクターが存在するが、最も影響力の強い先進国主導のアジア開発銀行を取り上げ、彼らの活動を考察しそれらは果たして同湖の住民である水上生活者にとって良いのか悪いのか、検証する。本稿では、まず第一章でトンレサップ湖の特徴およびその漁業資源に依拠した暮らしを営む水上生活者について説明する。そして、第二章で、筆者の調査によって明らかになった湖の商業化問題に直面する水上生活者の現状を指摘する。第三章では、その商業化を象徴する先進国主導の開発プロジェクトとして、アジア開発銀行のチョンクニアス環境改善プロジェクトの事例を取り上げる。第三章をふまえ、第四章において、カンボジア人によるNGO団体として唯一アジア開発銀行を監視し積極的に政策提言を行う「FACT

(Fisheries Action Coalition Team)」を紹介する。カンボジア人による自発的なFACTの取り組みこそが、水上生活コミュニティの立場を尊重し、トンレサップ湖の持続的な利

用へ導く最も可能性のある取り組みであることを示し、結論としたい。

【主要参考文献】

FACT (2008) “Entitlements and the Community Fishery in the Tonle Sap”

メコン・ウォッチ(2005)『水の声～カンボジア・トンレサップ湖の変容と脅かされるひとびとの暮らし～』特定非営利活動法人メコン・ウォッチ

Carl Middleton (2005) ”The expansion of ADB Water Sector: Judging the Effectiveness of ADB Water Management Projects in the Tonle Sap Lake Basin”